

日本語教育と異文化理解

浮 田 三 郎

はじめに

日本語教育に携わっていると、単に日本語あるいは日本事情（日本文化）の教育に関わる問題だけではなく、その周辺にある問題にも目を向けなくてはならないことに気付かされる。その一つは、異文化理解あるいは国際理解をいかに進めていくかという問題である。と言うより、日本語教育と異文化理解との関係は、異文化理解のテーゼの中に日本語・日本事情教育が含まれていると言う方が正しい。今日全世界における国際的な相互理解と国際協力のあり方が重要な課題となっており、世界（人類）の共存共栄の必要性が強調される「国際化時代」と言われる中で、言語教育は、異文化理解の一端を担っているからである。

そこで、本稿では、日本語教育の周辺で、外国人留学生達との交流の中で見聞したり体験した異文化理解の問題点や筆者の留学時等の体験から得たデータも参考にしながら、こうした世界の国際化時代の中での異文化理解と日本語教育（言語教育）の意義に関して考えてみる。

I. 異文化理解

1. 鎖国的日本

国際化時代と言われる中で、異文化理解は、異文化間で、人間が人間としてお互いを理解し、お互いの人格を尊重し合えるようになるためであり、世界平和につながる。したがって、もちろん、ただ一人日本（日本人）だけに要求されているものではない。

しかし、日本（日本人）は国際感覚（意識）（世界を視野にいたった考え方）の点で遅れているとよく言われる。確かに、欧米、中南米、東南アジア、アフリカなどと比べても、遅れていると言われるが、なぜであろうか。それは、日本の自然環境や歴史に帰するところが多い。

自然環境の点では、ぐるりを海に囲まれた島国であり、周囲の国々から遠く閉ざされた環境と言うことができる。

歴史的には、有史以来、単一民族的な国家として他の民族から離れた存在を続けてきた。徳川時代の鎖国政策だけではなく、ほとんどの時代、鎖国的な国の状態が続いていたと言えよう。

このように、日本は、異文化から遠く離れていたが故に、異文化を理解するのが不得手なのであり、異文化から理解されにくい民族になっていったと言えよう。

例えば、1992年に力士の小錦が「自分は外国人だから横綱になれない」などと角界の人種差別に関する発言をしたと言う（本人は否定）問題では、小錦がそのような発言をしたかどうか、真相・真意はともかく、あのよう問題になったこと事態、日本文化が他の文化に理解されにくいということを物語っているような気がする。

2. 開国と国際化

ところで、芳賀徹によると、現在は「第5回目の開国の時代」と言われる（森亘、1988）が、これは、裏を返せば、日本はそれだけ鎖国的な状態を続けてきていたと言うことになる。開国に関して、簡単にまとめると、次のようになる。

(1) 奈良時代：聖徳太子の前後の遣随使・遣唐使

(2) 室町時代（明との貿易）から安土桃山時代：キリシタン来日、秀吉の朝鮮出兵

(3) 1853年以降：神奈川沖にペリー、長崎にプーチャーチン来日、そして明治維新、外交関係、経済関係、政治関係において全面的に開国

(4) 太平洋戦争の敗戦：戦時中の鎖国から開国

(5) そして現在：関税問題、国内市場の自由化、経済的、科学技術の面、文化的な発展

しかし、このように五回も開国をして、現在のように、経済的、科学技術の面、文化的な発展をしても、まだ国際感覚の点では遅れていると言われる。確かに、その証拠（理由）を見つけるのには、苦勞はすまい。

例えば、留学生を見学などに連れていった時によく見聞させられることに次のようなことがある。日本の人は、外国人を見たら、じろじろ見る。「外人外人」と言って指さす。用もないのに「This is a pen.」などと意味の無いこと（会話練習？）を言う。話しかけられると、（それが日本語であっても、何語であろうとも）、「駄目駄目英語は分からない」などと言って逃げ出す。

このような日本人の意識は、徐々に、そして十年以前に比べると随分と、変わってきてはいるが、まだ、上記のような場面にしばしば遭遇する。

意識が変わってきた原因の一つは、日本を訪れる外国人の増加であり、留学生の増加であろう。政策的にも多くの留学生を受け入れ、民間レベルでも色々なイベントを開催して異文化間の交流を促進している。

国際的な意識への改革が遅い原因の一つは、単一国家的な独善的意識が長い歴史の中で染み着いてきていると言うことであろう。したがって、意識改革は、もう少し長い目でみなければならないのであろうか。また、諸外国に比べて、外国人の在住人口が少ないことや、日本人の海外旅行の仕方や、海外駐在員の生活の仕方にも原因があろう。日本人の多くは、独善的意識のミニ日本社会を引きずりながら、海外出張や海外旅行に出かけている

ようである。

日本の良き伝統は、守るに値するが、独善的意識で固執し過ぎると、国際的な目で日本を見ることができなくなるし、世界から理解され難くなるであろう。

日本が国際的な感覚で活動しようと思ったら、国際的な目で世界を見なければならない。とりわけ、日本自身を国際的な目で見なければならない。また、現在日本が置かれている立場を理解しなければならない。そして、異文化を理解し、国際的な目で世界を理解するだけではなく、その感覚で活動するように努力しなければならない。

また、留学生の派遣、留学生の受け入れの増大は、第5回目の開国の時代の特徴の一つと言えるであろう。それは、個人の専門的な研究の促進だけではなく、異文化間の相互理解に大いに役立っている。

このように、政治的なレベルからも民間レベルでも努力されなければならない。

ところで、今、日本あるいは日本人の国際化ということがよく言われるが、日本の国際化と言うのはどんなことであろうか。それは、日本の伝統、文化をかなぐり捨てて、ただひたすらに欧米化することでもなければアジア化することでもない。日本は、異文化を理解し、異文化にも理解して貰えるようにならなければならない。これが、日本の国際化に通ずるであろう。もちろん、国際政治的にも経済的にも様々な局面で国際化されなければならない訳で、たやすい問題ではない。

色々な偏見（日本人の眼からまた外国人の眼から）も取り除かれなければならない。これも、先ほど述べたように、日本人の伝統的な意識を改革していくことと並んで、易しいことではない。

II 日本人の異文化体験と異文化理解

1. 日本人の異文化理解

異文化理解にとって異文化体験は貴重である。しかし、実際に異文化体験をすることは万人にとって易しいことではないし、必ずしも、異文化体験が即正しい異文化理解につながるとは限らない。実際に直接異文化体験をすることは貴重であるが、間接的にも異文化体験は可能であり、間接的でも正しい体験、理解は大切である。

よく考えてみると、異文化体験をしたからと言っても、自分の目で見える範囲、自分の耳で聞こえる範囲内のことしか分かっていないのではなかろうか。いや、それも心許無い。筆者は、ギリシアへ4年間留学していたが、「ギリシア人はどうか、ギリシアは」などと時々聞かれて、一応知った顔して答えるが、自分が見聞き得たことは、たかが知れている。どこまで理解しているかどうか、怪しいものである。それは、出会い、友達、社会、階級、年月によって左右され、制限されるからである。ものの形は、見方、見る角度によって左右されるからである。

さて、私達日本人はどのようにして異文化の知識を得、異文化を理解しているのでしょうか。どのようにして異文化と接触してきたのでしょうか。日本人の異文化体験と異文化理解の仕方を考えてみよう。

1) 日本国内(間接的)

まず、日本国内で育った人々の場合を考えてみよう。前にも述べたように、ここ十数年で、日本の異文化接触の環境は、訪日する外国人の増大や留学生の増大など、相当変わってきているが、直接外国の人と交流する機会はそれほど多くはないであろう。しかし、間接的には、ほとんどの日本人が異文化と接触している。

(1) マスメディア

その媒体の一つが、テレビであろう。最近のテレビのプログラムの中には、諸外国の事柄が、ニュース、ドキュメント、コマーシャルなどで、かなりの頻度で放映されているし、外国の映画も放映されている。テレビを通して、欧米偏重の傾向は依然としてあるが、最近では、東南アジア、インド、アフリカなど色々な国の事柄を見聞できる。諸外国の大自然や風俗・文化、現在現実に行われている事や起っている事件など、また、映画などの中にはその国のものの考え方なども現れていることが多い。

ラジオは、テレビと比べて、映像がないので視覚に訴えるものではないが、気軽に耳にすることができ、ニュースや音楽などを通して異文化に触れることができる。

その外、映画やレコード音楽などを通して、異文化に触れることができる。

また、読書は、家にいてもじっくりと異文化体験ができる方法の一つである。国語教育の場合と重複するが、世界の文学作品(翻訳等)を通して、多くの国の自然、文化、風俗・慣習等に触れることができる。外国の文学作品だけではなく、雑誌、新聞等からも色々な情報が得られる。

(2) 教育の場

教育の場では、正しい国際的な視野を養わなければならない。誤った教育は危険であり避けられなければならない。

〔社会科教育〕

学校教育の中では、小学校の段階でも、社会科の地理や歴史の学習の中で、世界の自然や政治・文化の変遷等、異文化に触れ、それらを理解する一歩を踏み出している。もちろん、歴史的な記述に誤りがあるとはならない。

〔国語教育〕

国語教育の中でも、外国文学の翻訳などを通して、異文化に触れ、理解することができる。

〔外国語教育〕

小学校の高学年か中学校の段階からは、ほとんどの者が外国語(ほとんどが英語)を学

び始め、言語そのものが異文化とも言えるが、それを学びながら英国や米国などの自然や文化やお国事情などに触れる機会がぐんと増える。

大学等の高等教育の場では、さらに色々な言語を学ぶ機会が増え、そのような言語と多くの国の事情や自然や文化などに触れることができる。

〔家庭教育〕

親の教育・しつけは、また大切である。人種的偏見や物事の見方・価値観は、親の教育に負うところが多い。偏見は、親、教育、環境のなかで知らず知らずのうちに身につけていることが多いが、特に誤った人種的偏見は取り除かれなければならない。

(3) 異文化実体験（直接的）

また、日本国内においても、異文化との直接的接触は可能である。それは、日本に住んでいる外国の人々（異文化）との接触あるいは交流が考えられる。

その外、外国の劇団などの講演の聴講・観劇や外国の人々との文通も異文化との直接的接触である。

2) 海外（直接的異文化体験）

直接的異文化体験は、上でも述べたように、日本国内でも可能であるが、多くは海外で体験することができる。最近では、海外に出かける機会を得る日本人が多くなり、直接的異文化体験をしている人が増加している。

海外で実際に異文化体験をしてみると、今まで見えなかったものがよく見えてくるようになることがある。

例えば、筆者がギリシアに留学していた時、アテネで、明らかに東洋人と分かる筆者が、ギリシア人に道を尋ねられたことが何度かあった。日本で、例えば、明らかに欧米人だと分かる人に、日本語で道を尋ねる日本人がいるであろうか。ギリシアでは、意識の中に白人系と有色人系の区別はあるが、歴史的にも多民族との交流が行われており、前述したような閉鎖的単一民族的国家の日本とは意識の違いがあるようである。また、ブラジルでは、何度か日系のブラジル人に間違われたこともあるが、多くの国からの移民のいるブラジルではまた条件が異なり、こんなことは珍しくない。

あるいは、ギリシアでは、誕生日のお祝いは、「ネーム・デイ」で祝う。したがって、例えば、クリスチャン・ネームがフリストス（キリストのギリシア語読み）の者は、12月25日に自分の誕生日祝いをするのである。

また、人名に関して言えば、このようにキリストもいれば、古代の神の名前を貰っている者もいる。例えば、アフロディティ（ヴィーナス）もいれば、アテナもいるのである。

国際感覚は、隣国と接続していて、常に摩擦もあり、日本よりは発達している。したがって、言語感覚も、もちろん語族の関係もあるが、発達している。

言語に関して言えば、純正語と民衆語が存在し、複雑な言語闘争も存在した（関本至、

1968)。そして、代筆家がはばをきかしていた。

また、ブラジルは、モザイク的国家と言えるであろうか。色々な国からの移民が、それぞれの母国の伝統を少しずつ守りながら共存している。サンパウロ州もまたモザイク的である。

言語に関しては、隣国と接している地帯は、ポルトニョールと言われるポルトガル語とスペイン語の中間的な言葉も話されている。

生活習慣では、キスの挨拶も日本人には馴染まないであろう。

パック旅行のようなものでは、真の異文化実体験とは言えないかも知れないが、体験しないよりは色々なことが見えてくるであろう。ただ、正しい異文化理解につながらない場合もあるようである。

また、海外駐在の方々の多くは、特殊なミニ日本社会を形成していることが多いようであり、そして、その特殊社会の中では、その国やその国の人（異文化）の悪口ばかり言っているような場合もあるようである。

言葉の問題も少なくない。言葉ができないから、仕方なく日本人同士の社会の中でしか生活できなくなる場合もあるようである。あるいは、ギリシアやブラジルでは、その国の言葉ができない場合、英語のできる人としか交流がなくなり、その土地の文化の本当の姿が見えない場合もある。さらに、特殊な人としか交際しない場合も出てくる。

その点、留学生、遊学生などは純粋な感覚を持っている場合が多い。

3) 外国語教育の重要性と偏重

前節で述べたように、海外に留学や駐在したり、海外旅行したりした時、その国の人と交流ができることは、楽しいし大切である。異文化理解も深まる。そして、その国の言葉ができればなお良い。

(1) 外国語教育の重要性

前にも述べたように、言語教育を通してその国の文化に接触することができるし、習得した言語を利用してその国の文化体験をすることができる。少なくとも異文化体験の手がかりにはなり、異文化理解には重要である。例えば、森鷗外は、医学を学びにドイツに留学したが、そこでドイツ人の友人達とドイツ語で議論をし交流を深めている。そこでは、当然相当のドイツ語の能力が要求されるし、日本の立場、ドイツの立場等に関しても理解が深められたであろう。また、夏目漱石は、イギリスに留学し、英文学を研究するが、後になって、日本文学を見直すに至っている。私達の場合でも、外国語を学んでみると、日本語の構造がよく見えてきたりすることがある。

(2) 英語の偏重

何事においても、過ぎたるはおよばざるがごとしということが多い。偏重はマイナスな点になることが多い。英語は、確かに国際的な言語の一つではあるが、英語が全てではな

い。英語ができれば国際人になったように思う人がいるが、英語を話す人々が全て国際的かという、そうではあるまい。また、外国人を見ると、すぐ英語を使う場合もよく見かけるが、多くの場合親切心からであろうが、英語を話す国民ではない場合もあり、良い場合と悪い場合があり、注意しなくてはならない。

(3) 外国語コンプレックス

日本人は、外国語コンプレックスが強いと言われる。確かに、ギリシア、ブラジル、東南アジアなどの人々と比較してそうである（I-2参照）。これは、日本独特の環境や歴史が影響しているのであろう。

(4) 欧米コンプレックス

言語教育の欧米偏重とも通じるところがあるが、依然欧米崇拜主義が存在しており、これをどのように改めなければならないかということも、大きな課題である。

2. 異文化理解の努力

繰り返しになるが、異文化を理解しようとする努力が大切である。それを簡単にまとめてみると、次のようになる。

(1) 異文化と接触する機会をもつ努力をする。（III参照）

日本文化にも自信を持ち、何時でも何でも、少なくとも逃げ出さないようにする。

（I参照）

(2) 異文化を差別しない。

(3) 外国語コンプレックスをなくする。

片言の外国語（英語等）でもいいから、話し合いの場を持つ努力をする。

日本で接しているのだから、その人に合った日本語で話せばいい場合もある。（ギリシア、フランス、イギリス、ブラジルでさえも、日本語で話しかけられることは減多にない）

(4) 欧米コンプレックスをなくする。

日本の立場を理解し、謙虚に、自分（自国）に自信を持つ。自慢するのではなく、自信を持って異文化と交流する。

III. 外国人（異文化）の日本文化理解

1. 日本文化理解

それでは、外国人は日本あるいは日本文化をどのように見て、理解しているのであろうか。

留学生達の日本認識には、個人差もあるが、出身国別で、かなりの差があることが分かる。その理由は、それぞれの国の教育や社会環境等に影響されているからであろう。

1) 自国内 (間接的日本文化体験)

外国の人は、自分の国内では、II、1、1) で述べたように、日本人が異文化と接触してきたのと、多かれ少なかれ同じように間接的あるいは直接的に日本文化と接触し理解してきている。

留学生達と腹を割って話していると、彼らの中にも日本に対する誤った知識を持っている者もいるし、偏見を持っている者もいる。偏見や誤った日本認識は、親のしつけとか教育を通して、環境のなかで知らず知らずのうちに身に付いているようである。

教育の場では、社会科教育 (歴史や地理)、第一言語教育 (日本文学作品の翻訳) などを通して、日本文化体験をしている。

社会科の教育の中では、歴史の捉え方に、日本の見方と大なり小なりの差がある国が少なくない。色々な国から来ている留学生達と話合っていると、実に痛感することが多い。

日本語教育を受けている者は、少数であるが、日本文化を体験し理解するためにはやはり、日本語学習は大切である。

教育の場以外では、日本文学作品 (原書あるいは翻訳)、雑誌、新聞、映画、テレビ、音楽等を通して日本文化体験をしているはずである。

自分の国内でも、日本の劇団などの講演、文通等で、直接的日本文化体験はできる。また、社会生活の中でも、最近では海外進出する日本人も多くなってきており、海外駐在員 (特殊な社会を形成している場合もあるが) や留学生などとの交流の中で、日本人像を作っていく場合も多い。

そして、現状は、はなはだ心許無い。例えば、日本人は、「魚ばかりを食べている」「魚臭い」「生魚を食べる」「着物をきている」「丸顔の助べえ」などと、外国人に言われて、ハッとすることがよくある。一見、偏見のように思えるが、真実でもある。これらの指摘は、真実だとしても、言い方、見方によっては、軽蔑されているように聞こえる。また、明らかに誤った日本認識であったり偏見であったりすることもある。

2) 日本で (直接的日本文化体験)

日本で、留学生達が痛感するのは、欧米人 (白人、黒人)、英語国民、中国人、韓国人、東南アジアの人、日系二世、三世、帰国子女に対する日本人の対応の仕方の違いである。

また、彼らの日本文化体験の中には、出会いの幸不幸ということもある。留学生の出会い日本人にも個人差があり、人、地域、自然、社会によって、日本理解の視点が決まる場合もあるようである。

留学生と日本人との接触の際には、留学生自身の性格によっても、日本人の対応の仕方が異なる場合もあるし、また留学生の活動分野によっても、日本人の対応の仕方が違う場合がある。相性が合わないという場合もあるようである。

このように、彼らの日本理解には、出会いということも大切だということが分かる。

また、日本のマスメディアを利用して、例えば、テレビを利用して、日本理解をしている者も多くいる。テレビ・ドラマなどの特別な社会が即日本文化ではないが、注意深く見ていけば、日本社会のかなりの部分が見えてきているはずである（斎藤清三、1988 参照）。「汝自身を知れ」ということも大切である。自分自身が原因で色々な誤解が起こったりすることもあるようである。自国についても、まだ未知のことが沢山ある。留学生達も、また、自国の文化、自国の状態を外から眺め、理解することも重要である。そうすることによって、日本文化と比較してみることもできるし、正しい日本批評ができるようになるであろう。

2. 日本語教育の周辺と日本文化理解

1) 世界に日本を知って貰う努力

国際理解にとって大切なことは、異文化を相互に理解すること、即ち、日本の側から言うると他の文化を理解し、また、他の文化に日本文化や日本のことも理解して貰うことが大切である。そのためには、日本で国際的な交流の場を持つことも必要である。それは、例えば、次のようにまとめられるであろう。

- (1) 国際会議などの積極的な開催
- (2) 国際的なスポーツ大会などの積極的な開催
- (3) 留学生の受け入れ体制の整備
- (4) 日本語教育の充実

2) 日本語・日本文化教育の役割

以上のように、日本を理解して貰うためには、留学生の受け入れ、日本語教育の充実は重要な項目である。これは、IIで述べたように、日本人の異文化理解に外国語教育が大切な項目の一つであったことと同様である。

(1) 海外での日本語・日本文化教育

より多くの人に、日本の文化、日本人の考え方などを知って貰うためには、より多くの人々に日本語を学んで貰うことも大切で、現在日本語教育は多くの国で行われている。

例えば、日本文学を講じても、ブラジル、東南アジアなどでは、風土、気候（四季）が異なり、すぐには分かって貰えない場合もあり、日本語教育だけでは即日本文化を理解して貰うのは難しい場合もあるが、日本文化理解の手がかりにはなるのである。

逆に、日本人にとって、海外には分からないことが沢山あり、海外での日本語教育に携わる機会があれば、それを活かして異文化を学ぶことができるであろう。

(2) 日本での日本語・日本文化教育

〔留学生の受け入れ体制の整備〕

留学生の受け入れは、色々な意味で、異文化理解（国際理解）の役に立つ。彼らと交流

を深め、彼らを理解することは異文化理解につながるし、彼らに日本を知って貰うことも大切である。日本を自分の目で見て貰い、正しい批評をしてもらうことも大切である。外国人留学生から学ぶものも多いのである。

したがって、研究のレベルでも生活のレベルでも、留学生の受け入れ体制の整備は、かなりなされてはいるが、なお目下の課題である。そして、安心して生活でき、安心して研究できる体制を作るためには、日本語教育も大切である。日本語を習得し、日本人と話し合うことができるようになれば、ストレスも大分解消できるであろう。

〔日本語教育の努力〕

日本語教育を通して、日本文化、日本人の考え方などを知って貰うことも大切である。日本語の実力を付けて、自分の耳で日本を聞いて貰うことも大切である。また、このようにして、言語学習に関しても、欧米コンプレックスをなくす努力をしなければならないであろう。

(3) 日本語教育の周辺での異文化理解

日本語教育だけに限らず、留学生の教育の場では、異文化理解即ち彼らの文化的な背景を理解しておくことは重要である。

留学生の国の事情、宗教の事情などをよく把握していないと、とんでもない失敗をすることがある。

例えば、宗教に関しては、イスラム教の場合、断食の仕方、お祈りの時間、禁酒、肉を食べる時（鶏肉、牛肉）の注意を知っておかなければならないであろう。お祈りの時間だからと言って、遅刻したり、教室から出ていったりすることもある。キリスト教と言っても、ギリシア正教、カトリック、プロテスタント等宗派は多いのである。

男性と女性の差の捉え方も違い、風土、気候（四季）の違いなども理解しておく方がよい。

このように、それぞれ独自の考え方や慣習があるのであり、日本人の考え方を押し付けてはいけない。

留学生の日本語教育の場だけではなく、一般の外国人や帰国子女の日本語教育についても、概ね同様なことが言えるであろう。

おわりに

以上、国際化のための異文化理解の重要性とそれと日本語教育の関わり方、また日本語教育の周辺での異文化理解の重要性も探求してみた。留学生の日本語教育の周辺から、それぞれ異文化の諸相と特徴とかを探ってみると、見聞しなければ、思いもつかないような事実にも気付かされるものである。

そして、筆者の体験の中からもデータを取り上げ、異文化を理解するためには、どの様

な点に留意したら良いかも探ってみた。

また、異文化理解は、決して一方通行、あるいは片思いでは、意味が薄れ、真の国際理解あるいは異文化理解は実現できないのであり、全世界の人々の相互理解が重要な課題となっている。そして、現在実現不可能でも、その実現に向けての努力が大切なのである。

「国際理解あるいは異文化理解」という言葉は、分かりきったことのようにであるが、人間同士、偏見を無くして、お互いに理解し合って生きていくことが大切だということを、再確認させてくれる。

参考文献

小林哲也、「異文化間教育と国際理解」、『異文化間教育 2（特集：異文化間教育と国際理解）』、アカデミア出版会、1988年

斎藤清三（編著）、『国際化と日本観—留学生の日本理解—』、新日本法規出版、1988年

関本 至、『現代ギリシア語文法』、泉屋書店、1968年

永井滋郎、「国際理解教育の諸概念の再検討」、『異文化間教育 2（特集：異文化間教育と国際理解）』、アカデミア出版会、1988年

森 亘、『異文化への理解』（東京大学公開講座）、東京大学出版会、1988年